

ふるさと、風

第95号 (2014年4月)

風に吹かれて (73)

白井啓治

『春の嵐に吾身の明日を問う』

最近、己の人生の先が見えだしてきた、とか先の事を切実に考えられるようになってきた所為なのか、無性に腹立たしく苛々させられることが多くなってきた。日々の出来事を傍観しているだけなのに先行きが案じられて仕方がない。

自分を偉そうに見せようという訳ではないが、お前達、本当にそれが将来の人間生活に必要なことだと信じているのか、と声を大にして叫びたくなる。我が国にも多すぎる。

我が国の自由主義、民主主義は命がけの戦いで勝ち取ったものではない所為かもしれないが、リーダーと言われる者達の多くが我欲の視点を通しての身勝手な自由主義、民主主義を振り回し、正義ぶっているように見える。しかし、国民の多くはその事を見て見ぬふりをしたり、興味なくそっぽを向いていたりしている。実に溜息をつかざるを得ない。

特に自由自在でなければ存在意味を持たないマスコミの日和見主義的体たらくには反吐が出そうになる。こんなことを言うネットユーザーからクレームが来るかもしれないが、彼らの主張の多

くは無責任な烏合の衆の論である。ワイワイ盛り上げれば何だって良い、である。マスコミ報道もまさにその通りの烏合の衆を煽るだけのものになってしまっている。これでは佐村河内のような輩が現われても仕方がないだろう。実際に佐村河内を持ち上げ、頭に乗らせたのもマスメディアであり、彼を突き落したのもマスメディアである。騒ぎが起れば何でもいいといわれても仕方がないだろう。

原発問題は都知事選の争点にはならないと盛り下げたのもマスメディア。大阪市長選を無駄な一人相撲として盛り下げたのもマスメディア。福島原発事故は、国策として推進したのだからと責任を国になすりつけようとする東電の無責任極まりない対応を無言の擁護しているのもマスメディア。スタンプ細胞騒動を無責任に騒ぎ立てているのもマスメディア。まるで騒ぎを先導するのがマスメディアの務めだとも思っているのだろうか。メディアの報道に烏合の衆が集まってくると、そこには決まって訳の分からない評論家が登場して、評論ではない評論を話し始める。兎に角、何でもいから人が集まって騒ぎが大きくなれば、自分達の役割が果たせていると思ひ込んでいる。情けないよね。

フェイスブックを見ていたら、友人が面白い記

事をシェアしていた。ちよつと紹介してみよう。
※学力向上。ちゃんと勉強しないと、いい学校に行けなくて、いい会社に入れなくて、大変だよ。どの学校でも、学力向上に力が入ります。そして進学を薦めます。で、その結果何がおきるかって、間違いない、過疎化が進み、大都市への人口集中になります。だって、学校の言うところの、いい学校やいい会社は、地方にはないんだもん。
子供が一人、地方の街から出て、都会の大学へ行ったら、その街から外貨が1000万円流出します。…と続きます。

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月には創刊100号を迎えます。ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

確かに子供に投資しても国に帰ってくるなんて殆んどない。外貨も人材も流出してしまうのだ。いい大学とは学閥出世が出来る大学。いい会社とは潰れる心配が無くて給料が高い会社。こう眺めていると、自立心の全くない社会が良い社会のようにだ。全員がサラリーマンになって、貰う人になろうとしているのだ。

私はご免だ。折角いただいた命だ。受動的に生きるなんて勿体な過ぎる。自分の人生だぜ。自分が使わなければ。人生とは能動的に生きるから人生なのだと思うのだが…。

このフェイสบックへ呟いた、いい大学は地方の外貨を失わせ、過疎化を招くの文は、久しぶりに愉快な気分にはさせられた。中盤にこんな話も出ていた。…何となく専門学校。何となく大学。取り敢えず進学しておけば、人生の選択肢が広がる、という何となくの進路指導の結果、〇〇市からは、毎年100人程の子供がいなくなり、それと共に5億円ほどの外貨が流出します。…わが市も今が考えどころじゃないだろうか。新しい市長となった事だし。…ねッ。

進化の代償 (3)

菅原茂美

⑤文明の進化が「がん」を呼ぶ

二人に一人はがんになり、三人に一人はがんで死ぬ。これは避ける事のできない運命であった。…などというのはいい逃れ。がんになる要因は、産業革命以来、大変智慧のある(?)人類がセッセと作り上げた人為的な所産だ。その最たるものは、

原水爆。多くの実験を重ね、実戦で投下もされた。

これほどの大量破壊兵器を平気で実用する人類とは、正義のかけらもないのか。しかも2009年現在世界の核弾頭保有数は9カ国で23385発もある(イスラエルと北朝鮮は不確定数)。中国など実験場周辺で多発した白血病患者が、国に訴えたら、『この場所が国を守る実験場に選ばれた事を誇りに思え…』と一蹴されたという。更に米軍がベトナムで使った枯葉剤のダイオキシンなど。今でも現地では奇形児出産や、米国ではベトナム戦退役軍人ががんが多発しているという。更に農薬や洗剤など有害化学物質が大量生産された。挙句の果てに単細胞生物が³⁰億年もかけて作り上げたオゾン層を、スタコラサツサとぶち壊し、有害紫外線が地上に到達し、がんを引き起こす。オゾンホールは冷媒の不適切な使用の悲劇。また、動物性脂肪の多用による大腸がんの多発など、人類が作り上げた文明に翻弄されつばなし。無数の「病」を呼び込んで、何が文明の進化だ…。

さてタバコは、コロンプスなどがヨーロッパに持ち帰ったアメリカ大陸先住民の麻薬である。後、第一次世界大戦などで、戦場の兵士の恐怖感や、空腹感を緩和するために喫煙を奨励したという。更にタバコは、歯痛等、万能鎮痛薬のように使用され、驚くべきことに「がん」さえもバコで治せると考えられた経緯があったという。がんを引き起こす厄病神なのに…。その後タバコは、あらゆる職場で、また、労働者達が単純作業のストレス解消に多用されるようになった。今や肺がんは、わが国では男性のがんの中で一番多い。

ガンだけではなく今中国やインドがPM2.5でスッタモンダしているが、日本もかつて四日市

喘息・水俣病など、悲惨な公害の歴史を歩んできた。公衆衛生の普及などで感染症が減る一方、運動不足の上、食事やたばこなどからの生活習慣病が増加し、心疾患や脳血管障害が急増している。

更に人類は何を血迷うたか昼夜の逆転。不夜城に働く人口が増えた。睡眠促進ホルモンのメラトニン不足をきたし、睡眠障害を招き、免疫力を低下させている。夜間勤務の看護師はメラトニン不足から乳がん発生率が昼間勤務者の数倍高いなどはつきりしているのだから、しっかりとその対策を講じなければ、医療制度は成り立たなくなる。文明が進むほど人間は愚かな行為を繰り返す。とにかく産業革命以来人類は暴走を続け、自らの首を絞める行為があまりにも目立つ。

更に業績云々から職場でストレスが増え、精神を病み、自殺が増加している。社会が複雑化・巨大化していくと、個人の健康よりも、組織の業績が重視される。自由競争とかグローバル化など、好むと好まざるに関係なく巨大な圧力で押し流される。その陰には必ず隅に押しやられ、抹殺される犠牲者が無数に増える。これが智慧ある人類の行動といえますか？

人間は小単位の家族や組織なら助け合い、紳士的に行動するが、組織が大きくなると、とんでもない凶暴性を発揮する。国家間の醜い争いは、角の巨大化に歯止めが利かなくなると、絶滅していった「オオツノシカ」によく似ている。他を征服して巨大国家を作ろうとするような妄想は、叡智を持ってコントロールするシステムの育成が必要である。現在、世界の民主主義は、ヨチヨチ歩きの幼児期に見える。

* * *

⑥脳卒中を招いた進化の代償

脳卒中は脳細胞そのものが原因ではなく、脳に酸素や栄養を送る血管に欠陥があるから起きる。人類の脳は進化の初期は緩やかな発展をしていたが、200万年ぐらい前から、急に脳が巨大化を始めた。所が、栄養など後方支援する血管構造がそれについていけなかったことが悲劇を招いた。現在1・4kgの脳味噌に十分な血液を供給するためには、それ相応の丈夫な血管が必要である。ところが、脳の拡大が早過ぎたので、管壁の厚い太い血管が進化する暇がなかった。そのため、ひ弱な血管が猛烈に血液を送らなければならず、血管が枝分かれする部位など高い血圧により腫瘍ができ、破裂しやすくなり、脳出血を起こす。出血すれば酸素や栄養が届かなくなり、脳細胞は死ぬ。或いは出血した血塊が健常部位を圧迫し機能しなくなる。もし呼吸中枢など圧迫を受ければ、即死である。対策は一刻も早く開頭し、血塊を除去する事だ。脳細胞は酸素の供給がほんのわずかに停止すれば決定的なダメージを受ける。半身麻痺など非常に多い。手術は時間との戦いである。また、出血しなくとも血栓で細い血管がつまり、梗塞を起こせば、その先の部位に新鮮な血液を送れなくなる。大小様々の脳梗塞を起こす。それが「まだらボケ・本格ボケ」へとつながる。

脳は体重のほぼ2%であるが、15%もの血液を常時必要としている。それだけ脳は多くの酸素とエネルギーを必要とする臓器なのだ。そして、頭にかけてカッカカッカしている時には体温より2℃以上も脳温が上がり、正常な判断ができなくなる。神経伝達機能が混線するからだ。『頭を冷やして、出直して来い』とよく言われるが、血液は、栄養などを運ぶ他に、プラス・マイナスの体温を運ぶ装置でもあり、冷却水の用も為す。いわゆる脳は水冷エンジンなのだ。頭に来たら脳を冷やす時間をとる事。良しにつけ悪しにつけ、脳は活発に活動すれば、脳温はすぐ上昇し、そして、血管の壁は非常に薄いので、すぐ破裂しやすいう事をお忘れなく……。なお、受験勉強など、休憩なしのガリベンは、脳に疲労物質を溜めるだけで、効率が上がらない。大事なことは睡眠をたっぷり取る事。

⑦進化に関する四方山話

これまで人類は、格段の進化を遂げ、偉大なる文明を築いてきた：と言われるが、果たしてそうであろうか。文明を築くとは、聞こえは良いが、母なる地球をほじくりかえし、トンネルや構築物をむやみやたら造り、天空には偵察衛星などが乱舞。水や空気を汚しただけ：と言えなくもない。万里の長城(2400km)は、月から肉眼で見える唯一の地球上の人工構築物。歴代皇帝の猜疑心の塊のようなもの。自然破壊のシンボルそのもの。人間に比べ、他の動物は、せいぜい巣穴を掘るか、蟻塚を作るくらいで、環境を根本的に変えはしない。人類は大脳を膨らまし、無限に創造できると奢り高ぶって、地球を我が物顔で、好き勝手にひっかき回してきただけ：とも言える。

さて生物が、その種を維持するための「進化」とは、一体どんな意味があるのだろうか？ 進化について触れるためには、宇宙の成り立ちにまで遡る必要がある。なぜならば、人体は宇宙を構成する元素・分子から成り立っているからだ。

「37億年前、宇宙はビッグバンにより誕生した。宇宙も多段階の進化を遂げて、今日の姿に発展した。現在確認できている銀河の数は1700億個。銀河には、わずか1千万個ほどの恒星からなる「矮小銀河」や、100兆個の恒星を持つ「巨大銀河」などがある。

我が天の川銀河の恒星の数は2000億個である。その一つである我が太陽は、50億年前、その位置にあった前の恒星が老化・爆死した残骸である宇宙塵灰から誕生した。その塵灰の一部は中心に集まって密度を増し、強い重力が働き、中心部で核融合が始まり、輝きだした。原始太陽の誕生である。そして先代と同じ運命で、現在の我が太陽も、いつの日か燃料を使い果たし、同じように爆死する。勿論その時には地球も微塵に砕け、宇宙の塵灰と化す。これも、「物質の進化」であり、輪廻転生の宇宙版である。「進化」という言葉は生物学だけの専門用語ではないようだ。

そして、太陽を誕生させた残りの塵灰のうち、比重の重い物質は「岩石惑星」となって、内側から、水星・金星・地球・火星へと進化し、太陽の周りを回転することとなった。火星と木星の間には、惑星にまで成長できなかった無数の岩石の屑(隕石)が、ほぼ惑星1個分の質量で存在する。それが木星などの引力によりバランスを崩し、吹っ飛ばされて時々地球にやってくる。恐竜を滅ぼした巨大隕石(直径10km)落下事件などを引き起こす。小さなものは流れ星として、地球の夜空にロマンを運ぶ。そして、火星の外縁には木星・土星・天王星・海王星の「ガス惑星」など、比重の軽い惑星が回転している。一番外縁の冥王星は、惑星の基準から外れるとしてリストから除かれ、現在、太陽系の惑星の数は、8個となった。

さてこのようにして地球は46億年前に誕生し、

わずか6億年後、今から40億年前に地球を構成する物質から「生命」は誕生した。場所は浅い海の底。その生命の本質たるや、なんとも紳士的ではない。自分だけ生き残ればよい…とする利己的な遺伝子が支配する単細胞の生命体である。他の命も奪う、いわば「共食い」さえも辞さない残酷性を帯びた生命体である。現在地球上に生きている全ての生物は、この「原始生命」の子孫である。

進化とは？ 要するに己のDNAを、間違いなく次の世代に引き継ぎ易く変化していく事。

生き物とは、使い捨てのDNA運搬役。
DNAとは、何様のつもりか？ とにかく自分が生き永らえるために、細胞という奴隷を酷使する横暴極まりない主…と考える他なさそうだ。

* * *

余計な空想を巡らせば、現在の太陽誕生の元となった前の星の残骸も、実は50億年ほど燦然と輝き、その惑星には生命も繁栄し、栄華を誇った歴史があつたのかもしれない。寿命が尽き、老齡爆死し、世代交代して、今、新しい太陽に生まれ変わった。これらの事実を踏まえる時、前の太陽系の滅びゆく者の怨霊の祟りなのか、新たな太陽系の地球に生まれた生命は、残酷性極まりない生命活動をしている。要するに現在の地球に「生」を受けた諸々、特に人類の好戦的な残酷性に、私は嫌悪を感じる。

勿論、昨冬北海道で吹雪に迷い、我が子を寒さから守るため覆いかぶさって自らは凍死した父親の話や、宮城県の会社員が津波でさらわれて行方不明の妻を捜すため、57歳で潜水士の資格を取り、海に潜り続けている話など、崇高な人間性を讃える気持ちは幾重にもある。また、自然の生物や人

生を讃えた文学や芸術は無数にある。それも文明の一面ではあるが、いくら大脳を膨らまし、高度の文明を築こうが、狡猾な闘争本能に貫かれた人類という怪物に、心から拍手は送れない。野生の動物は遙かに純情で素直だ。

私は別にニヒリストではない。花や動物を見れば心から喜び、弱いものは助けてやりたい。しかし国家などが個人を虐げ、人の命を虫けらのごとく扱う巨大な意思。そういうものを絶対に賛美できない。忠誠を尽くす気にはなれない。過去・現在、そんな国家は多数存在。

人々を救うために創造された宗教が、争いの種とは悲しい限りである。宗教対立の醜さ。多くの動物は戦いが起きても一定線を超えない歯止め機能を持つ。人類はとことんやつけないければ気が済まない。何のために脳味噌を膨らましたのか？

聖人ぶるなど反逆されるかもしれないが、人類の食料を見れば、牛や豚は何も人類により喰われるためにこの世に生を受けたわけではあるまい。

進化の過程がもし逆転していたら、人という動物は、豚にとつて真に格好の食料であつたかも知れない。植物だつて立派に進化を遂げ、懸命に生きている。例えばあの真つ赤な唐辛子は、大方色盲である草食獣に食われ、種子を歯で噛み砕かれることなく、もし食われても、あの強烈な辛さで、二度と口にしない習慣をつけさせ、歯のない色彩感覚の優れた鳥類に発見され、丸飲みされて、い

ずこかで脱糞され、発芽するよう何万年もかけて進化したものである。子孫を残す高等戦略だ。野辺の草木を雑草・雑木などと蔑むなかれ。40億年しつかり生き残った戦場の勇士なのだ。

地球の歴史を顧みれば、直近5億年間に全生物

の90%前後が絶滅した事件が5回もあつた。主たる原因は海水の酸欠や、火山噴火による気候変動。地軸のぶれによる超氷河期などである。海面も100メートルくらい何度も上下している。1万5千年前、海面は今より90%低かった。そのお陰で、モンゴロイドはベーリング「地狭」を歩いて渡り、北米に進出できた。巨大隕石落下で、恐竜が滅亡した事件などは、自然災害としては軽い方で、それよりはるかに大きな想像を絶する天変地異は何度もあつた。今、巨大地震・津波・ハリケーンなどが、人類の浅智慧で作りに出した文明を破壊する故、被害が大きいと騒いでいるが、全生物を大方滅亡させた過去の巨大災害に比べたらちつぽけなもの。適正な人口密度なら局部現象に過ぎない。世界の巨大都市に人口が一極集中する愚かさ。

人類は地球上の生物の単なる一種にすぎない。大威張りの我が物顔で大地を汚し、他の生物が生存しにくい環境に追いやる権利などどこにもないはず。絶滅危惧種は数えきれない。いいかげんに目を覚まし環境破壊に終止符を打つべきである。

* * *

さて、現在宇宙は猛烈なスピードで拡大している。遠くの銀河ほど速い速度で我々の銀河から遠ざかる。そのエネルギー源は何なのか未だに不明である。更に各銀河の回転速度や銀河団を結成しているエネルギー源は、光や電波で観測できる現実の「物質の概念」からは、遙かに超える強大なエネルギー源がなければ説明できない。それゆえ、科学者は、その強大な重力源を「暗黒物質（ダークマター）」とか「ブラックホール」と呼ぶ仮説で説明している。この宇宙は、現在の物理学で理解できる「物質」は、わずか4%のみ。残りは、こ

前回高浜の港の様子や運搬物資の内容などを書いてきました。

今回は高浜からどの様なルートで江戸に向かったのかを書いていきたいと思ひます。

二、 関宿まわり

徳川家康は江戸の治水のため、現在の東京湾に注いでいた暴れ川といわれる「利根川」の流れを常陸川に合流させ、銚子の方に変えさせる命令を出した(1560年)。これは江戸を水害から守ることのみではなく、水路を使って効率よく物資を江戸に運ぶためのルート確保の役割が重要であったためと考えられます。寛文5年(1665年)、境町・関宿(せきやど)間に江戸川を移し権現堂川を締め切ること、霞ヶ浦や銚子からの物資を利根川を遡って関宿(せきやど)まで運び、そこから江戸川を経由して江戸へ運ぶ水運の大動脈が完成したのです。

まず港(漕)で荷を積んだ舟はそのまま霞ヶ浦を下って、潮来の手前の牛堀から常陸川(常陸利根川)に入ります。そこから25km先で利根川と合流し(銚子より15kmほど手前)今度は利根川を遡ります。

利根川と江戸川の合流地点である千葉県最西北端「関宿(せきやど)」で江戸川に入り、江戸に運びます(こちらの江戸までのルートはまた後述します)。しかし、常陸川から利根川に入った後更に、利根川を約200km川を遡ることが必要になります。地図を見るとこの関宿は千葉・埼玉・茨城・群馬との県

境にあり、この川が今の各県の県境になっていきます。利根川は茨城県と千葉県の県境で、江戸川は千葉県と埼玉県の県境です。また関宿は野田市の北部の町で明治半ばまで宿場として栄えました。

三、 陸路のショートパスと運河

しかし利根川を江戸川との合流点まで遡ることは距離も結構長く時間もかかってしまいます。そのため、考えられたのがこの2つの川(利根川と江戸川)を途中でつなぐ方法です。一つは途中で陸揚げして荷馬車に積みかえて川の間を陸路で運ぶ方法です。もう一つは川を水路でつなぐ運河の開発でした。

陸路の代表的な一つが、「なま(鮮魚)街道」です。なま(魚)という字(魚が 3つ)が使われます。

銚子で水揚げされた魚を新鮮なうちに江戸に運ぶため、夕方銚子を船で利根川の布佐まで運び、翌朝陸路を馬車で松戸まで「なま街道」を通って江戸川沿いの松戸へ運んで、再び船に荷を載せかえて江戸には次の朝の朝のセリに間に合わせる事が出来たのだそうです。銚子から江戸の市場まで約1日半の行程でした。この街道はできるだけ早く新鮮な魚を江戸に運ぶために作られたルートでしたが、布佐から松戸まで7里半(30km)あり、夏場は暑く、この陸路も夏場の利用は限られたものにならざるを得なかったようです。

記録によれば、この「なま街道」の途中にある金ヶ作(常盤平)の湧き水「子和清水」で魚に水をかけて、鮮度を保つたといわれています。石岡にも村上に「親は諸白、子は清水」といわれる碑が立てられています。このような良い水の湧くところにはいろいろな物語が必ずあるので大切に

していかなければなりません。でも石岡ではあまり注目されていないことは残念です。

さて、なま街道ですが、ここには元々の街道として木下(きおろし)と鎌ヶ谷(かまがや)行徳(なげ)を結ぶ「行徳街道」がありました。行徳は江戸とを結ぶ重要な場所であったためこのルートが使われても良いのですが、町中を通る上に距離も長いので、最短のルートとして布佐と松戸ルートが定着したと考えられています。しかしこの街道にまつわる話を収集してみると、それほど単純でもなかったように、木下(きおろし)と布佐(ふさ)の町の争いがあり、夜中でも関所を通行できるようにしたところと通れなかったところなどで揉め事もあったようです。布佐(総)でありここで大昔の古東海道や一昔前の東海道(佐竹街道・水戸街道)も利根川を渡っています。また木下(きおろし)の名前も材木を降ろした場所からついたと言われており、掘り起こせばやはりこういったところにも面白い話が眠っているのだと思ひます。

さて、もう一方の運河については、野田の手前で流山の方に2つの川を繋ぐ運河(利根運河)が計画された。

これは、明治12年に計画が持ち上がり、結局完成したのは明治23年になってしまった。開通当時は年間約37,600隻が通行し、関宿経由よりも東京と銚子間が6時間短縮された。しかしこの頃に鉄道が全国に次々と建設され、常磐線が開通したのは明治29年末であり、この開通により、鉄道の輸送時間は船に比べると比較にならない速さであった。

このためこの利根運河も活躍したのは僅か20年足らずで徐々に運航する数は減っていった。そ

してそんな中で昭和10年の台風のときに江戸川から利根川に水が逆流し利根川下流の水田地帯に大きな被害が出た。これにより運河の役割に洪水時の対策などが加えられ、その目的は徐々に変化していった。

もう一つ潮来手前の牛堀から常陸川を下らずに利根川とを繋ぐ横利根川（運河）が作られた。この横利根川は明治33年までは、利根川から霞ヶ浦に流れ込んでいた細い川であったが、これを整備して運河の役割を持たせるようにし、霞ヶ浦から江戸までの距離が60km短縮され、蒸気船などの大型船の航行が可能となった。

ここには今でも横利根閘門（こうもん）という立派なレンガ造りの設備が残されており現役で使われている。この水門の役割は利根川と常陸川を運河で結ぶだけでは、利根川が増水したときに霞ヶ浦一体が水害に見舞われてしまうため、これを防止するのが主な役割で、大正3年から10年まで7年間かかって完成した。これは霞ヶ浦の明治から大正にかけての大改修事業のシンボリックな水門（煉瓦造閘門）で国指定の重要文化財に指定されており、現在も現役で、保守・部品交換もされて維持管理され、平成6年には開閉の自動化が行われた。この閘門近くの横利根川には連日多くの太公望が釣り糸をたれており、隣接した水郷与田浦とともに豊かな水辺の風情を感じることが出来る場所となっている。また水門周りは桜の木も多い公園でもある。

この閘門の特色は前後に二つの水門があり、船舶はこの水門の間で一旦止まって、水位を調整して進む。横利根閘門の構造的な特徴は上下に開け閉めするのではなく前後にくの字に折れたように

開閉する。大正期の赤レンガ造りの構造物としても貴重な存在であると思う。

さて、横利根川の利根川との接続口はこの横利根閘門があるが、常陸川との接続口にも大きな水門が設けられている。牛堀地区近くの国道51号線に架かる北利根橋のすぐ横にある。こちらは通常の上下に開閉する水門になっているが、水門付近は小舟や、葦原に鴨などの水鳥がたくさんいてどこか昔懐かしい情景が広がる場所である。また牛堀（水郷）は版画家川瀬巴水が好んで描いた場所でもある。

さて、肝心の海との境となっている利根川河口堰と常陸利根川水門はこの横利根川から更に25kmほど後流にあり、銚子の町からは15kmほど手前にある。こちらの水門についてはまた後ほど述べる。

今回は水戸やそれ以北からの物資の流れについて述べる。

私のぼやき

伊東弓子

過ぎてきた時間が良く見えて、現実を嘆いている姿は繰り返されてきたのだろう。ピラミッドの中にあった「かきもの」にも「今の若いものは：」との一節があったと聞いたことがある。ごたぶんにもれず老いと共に私もその一人になった。重ねてきた時間の中の自分を高く評価している。ぼやいて何とかなるだろうか。ぼやいてもどうにもならないことの方が多すぎる。ぼやきが大きな力になればいいと願う気持ちもある。

彼岸中の今、墓に行けば塵の始末にぼやきたく

なる。墓に持っていった物は持ち返らないものだし、置いていくが、今は塵の種類が多く腐ったり燃えない物が多いので目に付く。退職後自称「墓守り女」として時々墓の掃除をした頃のことだったが、目茶くちな塵の始末に一方法を考えた。手づくり看板を立てた。「お墓はご先祖さまの眠っておられる所です。塵は丁寧に片付けましょう。墓守り女より」という物だった。当時の住職もお檀家に遠慮してか「あまり露骨に書かない方がいい」というので取り外したが、こういうお説教の方法もあるんじゃないかと思った。その後塵置き場が二ヶ所増えた。少しはよくなるだろうか。

小川三町とっていた頃「天聖寺の墓の方から紙屑、枯花が飛んできて大変迷惑だ」という古文書の一文があった。昔も今も変わらないのかと苦笑いした。

下玉里愛宕山台の西の方に、古くは「馬捨て場」だったという所がある。馬の供養の場所とは思えない傾斜地で捨て場と思わざるをえない。そこは野菜その他の塵が投げ捨ててある。杉の森は大半が竹に支配された森だ。嘆かわしいのはそれだけでなく、滝平二郎作の「もちの木」の話のモデルといわれるもちの木がある筈だが存在感はない。このままだといつかはもちの木も枯れてしまう。気がきではない。横断幕に「もちもちの木」のモデルになったもちの木が枯れてしまいます。竹切しませんか。馬の供養の場所です。塵を捨てないようにしましょう」と書いて縛りつけた。この程度のことでも人が動く筈がない。況してこの山は東京の方へ行った人の持ち山だそう。横断幕は人の手で取り除かれたのか、風に飛んだのか無く

なっていた。

地せぶりの争いはよくあるが、土も高い所から低い所に流れたり崩れたりすることを知っていないと自分が惨めだ。近くに緩やかな登り坂がある。短い距離だが畑の耕作者の生き方を感じる所だ。

右側の土手は除草剤を播くので草が青々とする間もなく、色が変わり土がぶかぶかしている。左側は草刈りをするので短かな草が青々とし花も咲く。土は見えない程確りと草で覆われている。我が家に関係のある土手のことでは、はらはら続きだ。最初の人は土手に種を播き始めた。話しをし止めて貰った。二番目に来た人は木の葉が落ちても草が伸びても気にしなかった。姑さんが時々掃除をする程度で影響はなかったが、三番目の人は綺麗好きとかでよく掃き掃除をする。土手に落ちた木の葉もガリガリと熊手で集める。土まで一緒に削り取っていく。これでは土がどんどんなくなる。近所隣りは何とといったらいいのか戸惑った。考えた挙句のグッドアイデア。龍のひげを植えることにした。当たり障りない方法でよかった。年に二回の霞ヶ浦大作戦の後にすぐ缶が、瓶が投げられる。私は暫くは木の枝や枯枝にさしておくと、通る人は何だろうと思うか知ったことではない。霞ヶ浦町時代にある道に「私を捨てないで」「私をつれていって」と書いた立札に缶や瓶が網に入れてさげてあった。先日通ったら立札の字も消え、網は色が変わって破れて缶も瓶も汚れたままあった。もう十年は経ったがそのままだ。古道に入ると大型塵が捨ててあることが多い。孫と三人でソファアを四基人通り迄引つ張ってきて、三人の人形を作って座らせた。「婆さんと孫のお喋り」と題して塵のことを考える夏休みの大型作品。

二か月位置いてあったが、婆さんも孫達もどこかへ行ってしまった。並木通りの木々が異様な格好だ。道路側の枝が短く切つてある。一本の木としてバランス的にはどうなのか、人中心の町づくりだから仕方がない。自分中心とはいえ今回の出来事には驚いた。三月の大雪の後、ある施設に電話がなった。「家の子が学校へ行くのに危ないから道路の雪かきをしてください」と大変な剣幕だったという。「各家、各施設の入口はそれぞれで行うが道路はみんなでしましょう」とはつきり言えるようにしたいと施設の人は呆れたのは通りこし悔しがっていた。全く憤りが込み上げてくる。

大人達確りしてよ。子供達がついてくるんだからといたい。通学時「おはよう」「おかえり」と声をかけても返事が殆んどない。どんどん行ってしまう。冷静にと自分にいきかせ「私、不審者じゃないよ」と言うことにしている。この頃わかったのは、登下校の時は、途中で遊んだり、お喋りしてはいけないそうだ。どんどん歩くことだそう。これでいいのかしら。時間もかまわず、場所もかまわず使える。度を越して使う。一番心配なのは母親と子の関係だ。一緒に歩いていても子供の頭の上の方で使っている。乗り物の中でも母と子は別の世界の中にいる。公園でも子供は勝手に遊んでいる。声をかけても子供の顔を見るわけではなく機械を見ながら「うん」「そうよ」と上の空。もつと酷いのは食事時の使用だ。大切な家庭でのコミュニケーションは何時とるのだろうか。学校、園での行事でも弁えもないのはこれからどうなるのか、と思う。勇気を出して語りかけると「すみません」と恥じらうように答えてくれる。見捨てたものでもない。地域おこしとか活性とか

いろいろの催しが競って行われている。子供達は与えられた、作られた枠の中で時間を過ごす。必ず食物が豊富に用意される。食べ放題食べる。又無料というサービスなのか多すぎる。主催する側（大人）は一つも二つも、子供にどうしたらいいか頭を捻ってほしい。

私のぼやきはぼやきで終わらせたくない。ぼやきは願いにつながっているから、今迄もそうであったように試行錯誤していこう。今回の「ぼやき」は自慢でもない。効果を狙ったわけでもない。遊び心も加わって細やかな抵抗をしてきただけ。自分が何をぼやいているのか、私自身をぼやいているのに気がついたのだった。

木之地のみろく

兼平智恵子

九月の敬老の日を入れての三日間、繰り広げられる恒例の常陸國總社宮例大祭に華やかさを添える様々な出し物についてご紹介しています。

今回は木之地町のみろくです。石岡駅前御幸通りを進むと町の中央を南北に貫く香丸、中町、守木の大通りに出ます。丁字路を左折しますと間もなく信号があり右折、石岡市民会館入口であり、土橋通りに入ります。例大祭の神幸祭、還幸祭には必ず神輿、供奉行列のある中心の通りとなっています。

例大祭時にはこの通りに入って間もなく左側の会所に青、黄、赤、白、黒色に塗られた五体（いずれも男性）と白色の女性一体を加えた六体の人形がそれぞれの面立ちで展示されています。これ

は木之地のみろくと呼ばれ、四角の屋台で口上と共に人形が踊る独特のお祭りの出し物でした。

木之地町は現在は府中二丁目となっております。石岡市民会館入口を入りますと二方通行になってます。青果店を左にして間もなく最初の交差点を左折、約一キロ余り、スーパータイヨウの通りに入るまでの道路を中心に両側に広がる町並で約三十世帯と小規模な町内になっています。

木之地町の名は府中城の内にある「城の内」を語源とする説と府中六木の「木」に由来する説などがあるそうです。町内には愛宕神社が鎮座しています。

江戸時代、府中の町と言われた石岡は夏から秋にかけて三つの祭りで賑わいました。京都の祇園会の流れをくむ八坂神社（現在の筑波銀行のあたり）の祇園祭礼（旧暦六月廿二、十四日の二日間）、翌月の七月二日には愛宕神社の祭礼が繰り広げられ、そして九月九日の常陸國總社宮例大祭です。その祭礼が行われる愛宕神社が鎮座する木之地町のかつての賑わいが窺えます。

明治期に入ると祇園と愛宕神社の二つの祭礼は次第に小規模化し各町内の風流物は總社宮の祭りに移行していきました。明治二十年、府中四組（香丸町、中町、守木町、富田町）交替の年番制度が始まり、明治三十五年になると十六の町内が名を連ね、現在まで続く新しい年番制度が生まれました。しかし昭和二十七年には小町であることを理由に木之地町は年番を辞退しました。

「みろく」とは弥勒菩薩であり、茨城県内の弥勒信仰は、鹿島地方を中心に発達したものといわれ寺院や神社の例祭などにみろく踊りが行われていました。鹿島地方では老婦人が集まって踊る念

仏踊りであるが他の地区に伝えられている「みろく」は人形踊りであり、県内に伝承されている人形の中でも一番素朴なものと言われている。

天明四年（一七八四）山口仙栄によつて著された「銭積善考」の「木之地の弥勒は元禄十五年歳（一七〇二）つくりしよし」とある記述から見ると今から三〇〇年前に作られたものと分かり、どの様な姿をしたものかは明らかでないと言われている。

木之地のみろくの記録として一番古いのは、江戸時代に府中の総名主を代々務めていた矢口家に伝わる、今からおおよそ二四〇年前の明和年間（一七六四～一七七二）、町年寄御用留の断簡の十四日「ざおん御祭礼之次第」

- | | | |
|-----|--------|-----|
| 一番 | ささら | 富田 |
| 二番 | やたいおどり | 中町 |
| 三番 | 子供おどり | 香丸 |
| 四番 | 子供おどり | 守木 |
| 五番 | みろく | 木之地 |
| 六番 | ふし | 泉町 |
| 七番 | 田打おどり | 幸町 |
| 八番 | ほうさい | 青木 |
| 九番 | かたかた | 若松町 |
| 十番 | ほろ | 仲ノ内 |
| 十一番 | 人さゝら | 金丸 |

「五番みろく木之地」としてその他多彩な出し物が記載されています。またその後の参加祭礼の記録は嘉永四年（一八五二）祇園祭礼「木之地みろく」と「嘉永四年香丸組亥御用留」に記載されているが以後の記録は発見されず、その姿を見ることができなくなっていました。

しかし、嘉永四年から八十三年後の昭和九年（一九三四）、總社宮の祭礼（年番守木町）に突然その勇姿

を現し人々を驚嘆させました。果たして八十数年間も何処に保存されて、どのように伝承されていたのでしょうか。幸いにも、金丸町に住む矢口秀文氏（故人）に木之地のみろくの話を聞くことが出来その聞き書きからより詳しく、町内愛宕神社に古い二体の人形があり、一体ははつきりわからず、二体目は女形で冠をかぶっていた。破損がひどいので矢口氏本人が冠の修理をして、祭りに出し、この年は四体の人形で、他の人形は旧美野里町竹原から借りたとされ、底抜けの屋台も、竹原のもので「木之地町」と書いた布を屋台の前面に縫い付け、囃子は笛と大太鼓で、大太鼓は矢口氏がたたき、笛は竹原から応援の老人が吹いた。会所で口上を奏上したが、「五体のうち爺が前口上を、若侍が受口上」をしていたように、女体の姫は口上がなく舞のみであったように記憶している。以上が矢口氏の談の一部抜粋でした。

こうして、大変古い歴史を持つみろくの、現在の六体の人形は、木之地町内の平井様に伺いましたところ、今から二十年位前に同町内の加藤要之助氏の作で、口上も加藤氏の記憶で残されているそうです。

是非に会所内で口上とみろく人形の踊りが復活なされば、石岡のおまつりに更に華を添える事と期待しております。昨年は事情により展示出来なかつたのですが今年はどうぞ見物の皆さん、木之地の会所にもお立ち寄り下さい。

平井様には色々参考となりますお話を資料をご提供頂きまして誠に有り難うございました。

参考資料・いしおか一〇〇物語、いしおか昭和の肖像

・春踊り出す

智恵子

廃墟スポット

小林幸枝

数年前に炭鉱の廃墟、軍艦島に出かけて以来、何となく廃墟めぐりのような記事に興味を覚えたのだが、結構ブームと言えるほど人気があるのだそうです。

日本全国に廃墟になった建物や構造物があり、長く放置されていると何時しかそこが〇〇スポットと呼ばれ、無責任に集まる若者達も大勢いるようです。

私の友人にもそうした廃墟スポットの好きな人がいて、あちこち見て回っている様です。外国の廃墟の写真を見せて貰い、日本とは全く違い随分ときれいなのに驚きました。でも紹介されている外国の廃墟と言うのは歴史的な意味のある物が殆んどで、ほとんどが史跡のような形で保存されているようです。

日本でブームのようにになっている廃墟の多くはホテルだとか病院で、そこにはいろいろな噂話と一緒にあってあるようです。

茨城にもブラックマンションと呼ばれる廃墟があるそうです。この廃墟は、建設途中で放棄された物らしく、ただただコンクリートの打ちっばなしの建物で、それが汚れてきた無くなっているものだからブラックマンションと呼ばれているのだそうです。

バブルの時にその気になって色々な建物が作られました。その多くが完成を見なかったり、完成してもオープンしないまま放置されたりしたもの。今でもたくさん残っています。もうあれから二十年近く過ぎてきているのに、大変な無駄遣いをしたものです。

廃墟建物は、放置されている様ですが、本当は管理者などがいて、勝手に入ったりすると不法侵入などの罪に問われることもあるので、気をつけなさいといけません。

廃墟と言っても、それは見方を替えると負の遺産とはいえ歴史的遺産と言えましょう。オカルトスポット扱いする前に、ばかげた時代が少し前にはあったのだとの反省スポットと考えたいものです。

【風の談話室】

今年はずいぶん遅い春になるものと思っていたが何んと例年よりも早い春の盛りとなった。まるで北海道の春の様に、花といつ花が一斉に開いた。季節を追って花がやって来るなんて風情は今年はお預けであった。

とはいえ春の花たちが一斉に咲き誇るというのは美事である。春満開、春爛漫とはこんな花たちのことを言っただろうか。
一斉の花盛り。お美事。

《ことば座だより》

確りと立って歩く

脚本・演出 白井啓治

新しい舞台表現、朗読手話舞による常世の国の恋物語百を船出させて8年。演劇界でのただ一人の手話舞女優小林幸枝の表現スケールも大きく花開いて来た。特に昨年11月に行われた両国シアタ

ーXでの東京公演を境に表現力は見違えるほど大きなものになってきた。

この大きな要因は、ヨネヤママコと言う大女優と一緒に舞台創りを経験し、ママコ自身の表現創造への取り組みを目の当たりにした事であった。これまで十分な理解の届かなかった、朗読を主旋律として舞表現を創造するということを、ママコ女史の表現創造過程から盗み覚えた、小林幸枝という聾者ならではの取り込み、吸収力の才能といえよう。

この東京公演によって、小林の朗読舞とは是非一緒に舞台創りをしたいという話を、札幌在住の熊谷敬子さん（東京公演での衣装デザイナー）から頂き、5月18日、札幌の北海道立道民活動センターかである2・7で実現の運びとなった。

東日本大震災の時、気仙沼市で津波に遭った女性の体験話を基に熊谷さんが書き下ろされた「かがり舟」という物語を、小林と一緒にコラボレーション出来る様に小生が脚色した本で、札幌の表現集団「つむぎびと」一緒に朗読舞劇として演じられる。

札幌で演じられる「かがり舟」は、ギター文化館での6月の定期公演でも同じ仲間達と再演する事になった。朗読舞劇「かがり舟」は小林幸枝が初めて小生以外の人の朗読で舞いを演じる事になる。非常に楽しみである。

また「つむぎびと」でギターを担当している亀岡君とは、ギター文化館コンサートシリーズとして組んでいたいただいた11月9日（日）「里山と風の声コンサート」で、詩の朗読とクラシックギター演奏を行うことが決まっている。

小さな波紋でもいい。ふる里の文化力として、

上質の芸術表現をとの願いでスタートさせたことば座であるが、創設8年の今年、着実な花と実をつけてきている。

9月に100号を迎えるこの「ふるさと風の会」の妹である「ことば座」も確かな点を打って希望をつむいで行きたいものである。

以下に、かがり舟に挿入した詩の一つを紹介しておきましょう。この詩は、朗読される詩ではなく、物語の山場の朗読の時に、その背景に舞う詩で、一つのコード進行の中で異なるメロディーが演奏されるといふ方法に似た表現である。

（かがり火の舞歌）

人の精神世界は

一本のかがり火の光によって開かれます。

そして、

かがり火の光りは

人の心の

望みを照らしてくれます。

人は凍りついた暗闇に

怯えていた時

一本の燃える木の枝を

手にした事で

生きるといふ希望の物語を

紡ぐことを知りました。

炎を上げて燃える

一本の枝のかがり火は

闇を照らし

凍えた心を温めてくれる。

だから、

人は絶望を感じた時には

あたたかい炎をあげる

松明を心にかかげるのです。

高く燃え上がる

かがり火の明かりに

希望の物語を紡ごう。

《一寸一言・もう一言》

||一寸一言||

遺跡と犬の思い出

打田昇三

世界四大文明のうちモヘンジョ・ダロ遺跡で知られたインダス文明は、他の三大文明に比して其の解明が遅れていた。近年はドーラビーラーなど高度な都市遺跡が見つかり、他の三大文明に劣らない研究が進められている。

私は最初の遺跡訪問がガンダーラの仏教遺跡とモヘンジョ・ダロであったが、カラチのホテルで出された濃厚な牛料理のエネルギーに負けて体調不良の状態でもヘンジョ・ダロに飛んだ。真冬でも陽光が厳しく、ホテルで準備してくれた弁当は現地に居た犬の親子に頼んで食べて貰ったのだが大事な手帳を機内に忘れたことに気付いた。諦めていたところ、帰りの飛行機が来た時と同じで乗務員が何も言わないのに手帳を渡してくれた。窓から外を見ると犬の親子も空港内まで見送りに来てくれていたし、デンマーク製の双発機（フ

オッカー二十七型）も快適で、ホテルの牛肉さえなければ良い旅であった。それ以来、私は牛肉を食べない。もう三十年も前のことであるから犬の親子も居ないと思うが、会ってみたい気がする。

モヘンジョ・ダロ遺跡の特徴は優れた排水設備特に洪水対策と言われる。余計な心配だがオリンピックを招致する東京に五、六千年後にも残る「優れた〇〇」と言われるものがあるのだろうか？

「教育」の任務

菅原茂美

教育の任務は人にものを教え、人格を育てる事。道徳を特別教科というが、教育の基本は、まず家庭にあるはず。社会道徳の基本は親が自ら範を垂れ、子供はそれを見て育つもの。教育は学校がやればそれでよい。これでは親の責任逃れだ。

教員は、その資格を持ち、多くを学んできたのだから、児童に分かりやすく知識を授ける事は当然。しかし、知識をたっぷり詰め込めば教育は完了ではない。でき得れば児童には、一律ではなく各生徒の個性を見出し、それを伸ばす指導をしてほしい。教員には児童にインパクトを与えるオーラが欲しい。校長や親の顔色を見るのではなく、全生徒にしっかりと向き合い、いじめ等は早急に察知し、悲劇を生まないよう、細心の注意が必要。

今の大学教育はどうなっているの？ 小学校の分算計算も碌にできない大学生に修了証書を渡しはいけない。国立は勿論、私大といえども国補がある。それは国民の税金だ。粗製乱造は厳禁だ。

さて問題は人材をいかに「育てる」かだ。学歴社会はナンセンス。学歴がなくとも優秀な人材は

多数いる。国家の繁栄は、まず「人造り」。長期展望で人材育成に全力投球すべきだ。特に官公庁は、偏差値重視で採用すれば、御覽の通り借金大国と天下り社会を作っただけ。国富よりも省益重視の高級官僚に専横を許してはいけない。

新採職員は、いやしくも、社会道義に反する利に聡(さと)いだけのシステムには、上司に反発するぐらいの気概で、社会正義を貫く人間に育ってほしい。近年、モラルの欠落が目に見える。国家の品格は、個々人の心がけ次第と考える

もう一言

平景清伝説の誤り

打田昇三

石岡では「平景清が桓武平氏の末裔」などという誤伝が信じられているようであるが「平景清」は本姓が藤原氏、伊勢国の住人で、平家が伊勢に進出してきた頃に服属して代々の家人として仕え平氏の名乗りを許された家系らしい。

景清のような系統の武士は「郎等」と呼ばれており、それに対して一門末流から家臣になった者が「家の子」であり、地方豪族で服属した者が一般的に呼び名で「被官」と言われるのである。

悪七兵衛と称した景清の父親は上総守忠清、此の人物は宇治川の合戦で敵の抵抗に弱気となり、迂回作戦を主張して関東武士に皮肉を言われた。また源頼朝を討つ為に平維盛を将として東征してきた参謀長なのに大将の平維盛と喧嘩をしたり、富士川に出陣した際に当時の慣例により合戦前の交渉に来た源氏方武田軍の軍使を、義に反して斬つたため部下の兵卒にまで恐怖心を植え付け水鳥

の羽音に驚いて平家軍が逃亡する原因を作った。息子の景清も平家没落後に、諸国を逃げ回っていたので各地に伝説が残っただけであり、この一族が桓武平氏で有る筈も無く、平家に対する功績も伝説が残るほどの事でも無い。なお平家の「家の子」では肥後守貞能、弥平兵衛宗清、越中次郎兵衛盛嗣らが平家に恥じない生き様をしている。

春の花々が一斉に咲き乱れるのも良いものであるが、皆が去って行ってしまつたら、ただただ暑い夏がやって来るのだろうか。いや、これからまだ緑の芽吹き、里山の風景が生れるのだ。その前に、里山の山桜を褒めに行かなくては。

【特別企画】

打田昇三の『私本・平家物語』

巻一・(2)

- ・ 禿童のこと
- ・ 吾身栄花のこと

(一)で急速に伸し上がってきた平氏、特に平清盛は不動の地位に昇る。今回、書く部分は平家繁栄の陰に泣く人、混乱の時代に翻弄される人の話であり、平清盛が表面には出て来ない。当時の時代背景として捉えて頂きたい部分である。

禿童(かぶら)のこと

「禿(かぶら)」は「かむろ」とも言い、語源は「かぶろ山」木の生えていない俗に言う「ハゲ山」だと辞書にある。其処から転じて頭髮が心細くなった状態を表わす言葉になったらしい。さらに、少女が髪を短く切り揃えた状態にも使う表現のようである。平家物語に登場するのは後者である。

さて人臣の最高位に登りつめた平清盛公は仁安三年(一一六八)十一月十一日(史実では二月十一日とされる)に大病を患った。肺炎でも起こしたのであろうか。五十一歳のときである。医学が発達していない時代であるから生き永らえる為に仏の加護にすがろうと、髪を毛を下ろして出家入道し(形式的に僧侶になり)法名を「淨海(じょうかい)」と名乗った。その効果で難病が忽ちに癒えて天命を全うした、ということになっている。

「頭寒足熱」というから間違いではないのかもしれないが、急に頭だけを涼しくしたのは病気に良くないのでは：死んだのは十三年後であるが其の時は身体全体が湯を湧かすほどの高熱で苦しみぬき、日ごろの罪業、と言われた。(巻第一)

平清盛は太政大臣で出家していたから入道相国(にゅうどうしようこく)相国は太政大臣)と呼ばれた。出家した後も此の人の栄耀(えいよう)好運(こううん)出世(しゅっせ)は尽きないと思えて、人々の従属することは吹く風に草木がなびくようであり、世の中から仰ぎ見られることは降る雨が国土を潤すようであった。平家一族は、その館の所在地名から「六波羅殿」と呼ばれたが、この君達(きんだち)若君(わがきみ)と言うだけで他の華族たちも、或いはそれまで名門と呼ばれていた人たちも、肩を並べたり対抗することが出来なくなっていたのである。小舅(せうきゅう)清盛の妻・時子の弟に当る平大納言時忠卿(桓武平氏高棟流)は慢心して不遜にも「この一門

（平氏一族及びその傘下に居る者）で無い者は皆、人では無い！」などと豪語していた。

この場合の「人に有らず（原文）」の意味は現代的解釈による「悪人＝人非人」と言うことでは無く、単純に言えば「人間らしくも無い」又は「人並み以下」と言うことらしい。それでも百分のぼせ上がった発言である。そのような有り様であるから、世間の人々は何とかして平家との繋がりが出来るようにと願って、烏帽子（えぼし＝元服した男子が略装に用いる黒塗りの帽子）の折り方から始め、衣装の着け方に至るまで何事も「六波羅様（よじ）」と言う平家若者の真似をしていた。

然しながら、どのような時代でも如何に立派な政治が行われた場合でも、世間からはみ出た者や世の中から見捨てられた者たちは、不平不満が多いから陰であれこれと悪口を言う。これは極く当り前のことだが、平清盛の時代には、そういう愚痴を漏らす者が居なかった。なぜかと言えば清盛本人の発案で、年齢が十四歳から十六歳ぐらいの少女たちを三百人ほど揃え、全員の髪を「禿」のように切り、赤い直垂（ひたたれ＝武士の制服、当時は庶民の平服を着せた形で雇用し「禿（かむろ）」と称して街に放ち、彼女らを諜報員兼不満分子摘発者として使ったのである。

この者たちが都の各地を歩き回り、平家のことを悪く言う者が居ると、それを聞き付けた禿が仲間を呼び集めて、噂をした者の家に乱入し家財を没収した上に本人を捕えて六波羅の平家館に連行した。その様な状態であったから、平家の横暴を見たり知ったりしても、これを口にする者は居らず「六波羅の禿」と怖れられ通行の馬車（馬）さえも避けて通ると言われたのである。また通常の場合、宮中への出入りには、如何に高官でもその姓名を名乗るのが礼儀

であるが、平氏の場合はそれが行われず（無視されたので）心有る都の役人たちは口には出さぬが心の中に嘆いていた。

この部分の文章は、中国（唐）の玄宗皇帝の寵愛を受けた楊貴妃の一門が権勢を振るって「禁門の出入を問わず」とする文言が「長恨歌伝」にあるのを引用したもの（平氏の専横を示したもの）とする。「長恨歌」のほうには「姉妹弟兄皆列士（しまいていけいみななどをれつす＝姉妹弟兄は皆が領土を貰って＝貴族になって）」と書いてある。

なお「禿」について少女では無く少年とする説もあり、また此の話が「祇園精舎」に悪業の例として登場する「漢の王莽（おうもう）」の故事から引用したのではないか、とする学説もある。つまり、平清盛が「禿」を使って庶民の口を封じたというのは事実では無いかも知れない。しかし何時の時代でも権力者は世論の反発を恐れる。近代でも国家が主導して特高警察や憲兵隊を使い、国民を黙らせていたのであるから、平家の繁盛の陰に不気味な小娘が居ても不自然ではない。

平家の家督は、直前の「鱸」で平忠盛から清盛に移ったのであるが「源平盛衰記」は家督相続のことに触れており、平家内部も全て円満とはいかない一面が窺われて面白い。嫡男ということで平氏が所有する諸国の荘園が全て清盛のものとなり家宝も受け継いだのだが「抜丸」という名刀だけは池禅尼が生んだ頼盛に与えられた。そのことで兄弟の仲が悪かった。とする。池禅尼は源頼朝を助けた―それが平氏滅亡につながるもので、頼盛の立場が悪くなることは誰でもわかる。

吾身栄花（わがみのえいが）のこと

平清盛は自分が官僚として頂天に昇り栄華を極めただけではなく、一門の人々が、それぞれ共に出世をして平家は大いに栄えた。まず嫡子の重盛は内大臣であるが左近衛の大将（中納言相当）を兼ねており、次男の宗盛は中納言で右近衛の大将を兼ねた。三男の知盛は近衛の中将で従四位相当だが官位が三位に上がっていたので「三位中将（さんみのちゆうじょう）」と呼ばれた。嫡孫の維盛は四位少将（しいのしょうじょう）であり、平家一門の人々は全て高位を与えられていた。

このうち「公卿（ききょう）」と呼ばれる大臣、大納言、中納言、参議及び三位以上の上級貴族が十六人も居り、「殿上の閨討」の項で述べた「殿上人（でんじょうびと＝天皇の御座所近くに昇殿できる者）」が三十余人も居た。さらに受領（ずりょう）と呼ばれる国司や、天皇に近侍する衛府の役人、それぞれの官庁で相応の地位に付いた者が六十余人もいたのである。正に高級官僚は平氏以外に見られないような状態であった。

昔、聖武天皇の時代の神龜五年（七二八）に朝廷の役職として天皇側近の警護を任務とする「中衛府（ちゆうえふ）」が置かれ、其の長が初めて大将に任じられた。嵯峨天皇時代の大同四年（八〇八）には中衛府が「近衛府」に改められたのだが、それ以来、兄弟が左近衛・右近衛の大将として並ぶことは（藤原時代でも）僅かに三、四度でしか無かった。それは文徳天皇時代（八五〇～八五八）に藤原良房右大臣が左大将となり、右大将に藤原良相大納言がなったのが最初で、是は閑院左大臣と呼ばれた藤原冬嗣の子らだからである。次に朱雀天皇時代（九三〇～九四六）には小野宮殿こ

と藤原実頼が左大将に、右には九条殿こと藤原師賢が補された。これは貞信公こと関白太政大臣・藤原忠平の子供たちである。また後冷泉(これいせい)天皇(一〇四五〜一〇六八)のときは左大将が大一条殿こと藤原教通、右は堀河殿こと藤原頼宗であり、権勢を誇る御堂関白こと藤原道長の子らになったのである。さらに近い時代では二条天皇(一一五八〜一二六五)の代に左大将は松殿こと藤原基房、右大将は月輪殿こと藤原兼実が任命されたが、この兄弟は法性寺殿こと関白・藤原忠通の子である。

此处に述べたのは、いずれも父親が天皇に代わって政治を行う摂政であった方々の御子息であり如何に桓武平氏の末裔とは言っても藤原一族以外の、言わなければ一般人からでは(左右の近衛大将を兄弟が占める例は無かつたのである。ましてや、平氏は殿上の交わりをさえ嫌われた人の子孫(祇園精舎のこと、殿上闘のこと参照)なのに身分関係が厳しく、着用する衣服が制限される中で豪華絢爛たる衣装を身に着ける大臣、大将となつて兄弟が左右に並ぶことは、世の中が変わつたとは言いながら何とも不思議なことである。

前段では「禿」が活躍?して庶民の口を封じた訳なのだが、世間には勇気の有る人が居たと見えて、平家の兄弟が左右の近衛大将を占めたことを諷刺(ふうし)する落首(匿名の批判の歌)の立て札が六波羅の門前に立てられた。それには「伊予讃岐左右の大將かきこめて欲の方には一の人哉」とあつた。重盛が伊予守を、宗盛が讃岐守を歴任したことに掛けて皮肉つたのであろう。平家物語には無いが源平盛衰記が伝える話である。

よく考えれば藤原一族も、何処の馬の骨だか分からないのに天皇家に寄生して権威を誇示していたの

であるから、何も平氏が申し上がつてきても良い訳であるが、平家物語に此处まで悪く書かれたというのは、天下を取られた藤原氏の恨みが尋常なものでは無いことを示している。

ついでに触れておくと、天皇の親衛隊とも言うべき組織が三衛府であり、内裏に近接するところを護り天皇の外出に従うのが近衛である。次に一部の門の警護と天皇外出の供と雑役を兼ねるのが兵衛府で守備範囲は内裏・近衛を囲むようになる。衛門府は基本的に武官であり、お供に際して常に弓矢を持つ。守備範囲は一番外側になる。なお近衛、兵衛、衛門の各府は左右があつて合計六衛府になり、現代とは違つて左のほうが優先する。

話を戻すと、平清盛には男児のほかに八人の娘が居て、それが皆、それ相応に良縁を得て幸せになつた。高倉天皇の中宮(皇后宣下を受けない皇后)となり安徳天皇を生んだ次女の徳子は壇ノ浦で悲劇を味わつたけれども…。

名は伝わっていないが、長女は桜町中納言こと藤原成範(平治の乱で源義朝に殺害された藤原通憲こと信西の子の許婚であつたが、平治の乱の後に花山院の左大臣と呼ばれた藤原兼雅の御台所となつて多くの若君を生んだ。桜町中納言は風雅を好んだ公家で、桜の名所である吉野山を訪れたり都の一面に桜の木を植え回して其処に屋敷を建て住居としたことから桜の名所として訪れる人々が「桜町」と言うようになった。通常は桜が咲いてから七日ほどで散つてしまうのであるが、この中納言は花の名残を惜しんで神様に祈つた。その功德で二十日余りも散らなかつた…と平家物語に書いてあるが嘘である。天侯の所為で何日か花の寿命が延びたのであろう。

それよりも平清盛の長女は、不幸では無いが数奇

な運命の女性であつたらしく、源平盛衰記には桜町中納言に嫁したけれども夫の親友であり義兄弟の様な藤原兼雅に見染められて、心ならずも夫が離別して兼雅に譲つたとする純愛物語が書いてある。藤原成範は平治の乱の後に無実の罪で下野国へ流罪になつたため、多分、父親の清盛が引き離したのだと思う。この女性は親父の清盛に似無いで心が優しく、絶世の美人で絵が上手だつたらしい。頼まれて天皇の居る紫宸殿(ししんでい)の障子に絵を描いたと言われる。

次女の徳子は高倉天皇の中宮となつて皇子を生んだ。此の皇子・言仁(ときひと)親王が皇太子に立ち、二歳で高倉天皇から譲位されて安徳天皇となつたため徳子は院号を付けられて建礼門院と称された。入道相国(太政大臣・平清盛)の娘であり、また国母(天皇の母でもあるから、これはもう何も言うことは無い)。

三女は盛子と言ひ、六条の摂政と呼ばれた藤原(近衛)基実の北政所(正室)となつた。夫の基実は二条天皇の摂政を務めたが、盛子も高倉天皇の養育に当り「准三后(じゆんさんこう)太皇太后、皇太后、皇后に準じる地位」を天皇から与えられた。そのために「白河殿(しらかわどの)」と呼ばれて宮廷内で重きを成した女性である。なお高倉天皇の生母は平清盛夫人(時子の妹)である。

盛子の妹は、中御門家出身で冷泉大納言と呼ばれた権大納言・藤原(鷲尾)隆房に嫁した。五女は近衛家藤原基通の正室となつた。この女性は美人の上に極めて色白だつたようである。「衣通姫(そとおりひめ)」と呼ばれ、衣装も透き通つて見えたと言つが繭になる前の蚕では無いから嘘であらう。

和歌に堪能であつたと言つのは本当らしい。なお基通は出家して洛南の普賢寺に住んだので「普賢寺

殿」と呼ばれた。また三女から五女までは確実に外注で生まれた娘を時子が引き取って育てたらしい。(他の娘もそれに近いであろうが…)

六女は七条修理大夫(じゅりのだいぶ)国土交通省の次官
級藤原信隆に嫁ぎ、七女は母親が厳島神社の巫女(みこ)で有った為に御子姫君(みこひめぎみ)と呼ばれていたが、十八歳のときに後白河法皇の許に出仕した。やがて後白河法皇の側室となり、その有様は女御(にょご)第三皇后のようであった。最後は、牛若丸の母親である常磐(ときわ)が生んだ娘で、九条家の藤原兼実(右大臣)に奉公して上臈女房(じようろう)というほう高級女官となり「廊(ほそどの)の御方」と呼ばれた。なお資料によつては、最後にもう一人尼さんになった女性がいたらしいが、平家の衰亡期に生まれたのであるうか、記録が少ない。

このように平清盛の娘たちは頂点を極めた徳子さんと気の毒な尼さんを除き、平家没落に関わり無く貴族社会で生き抜くことが出来たのである。これら公卿に嫁いだ女性たちの子孫(末裔)が、現在の天皇家に伝わっているとすると説もあるから禿が居なくても平家の悪口は言わない方がよい。

全盛時代に於ける平家の威勢は底知れず、形状が蜻蛉(トンボ)に似ているところから秋津島と呼ばれる日本の国土は僅かに六十六か国しか無いが、その中で平家一族が領有する国土は三十余か国もあり、既に半分を越えている。その他に平家が個人的に保有する荘園、田畑は数え切れない。平家一門の美々しく着飾った連中が御所内に満ち溢れて花が咲いたようである。街の中では平家一門が乗り回す車馬の列で混み合い「門前市をなす」という例え通りの状態であった。

さらに平家は中国大陸の「宋(そう)南宋(じ)」との

交易をおこなっていたので中国産の貴重品、例えば揚子江下流域から採れる「楊州の黄金」、中流域から産する「荊州(けいしゅう)の玉」、名産地(呉郡)の「綾絹」、上流地方で産する「錦」などなど「七珍萬寶」と言われる宝物がいつも蓄えてあり屋敷内には歌舞音曲を奏する大きな建造物と演目に必要な道具類が揃っていて、舞楽などの遊びや乗馬などの為に贅沢な道具類が揃えられていた。それは恐らく宮中でも帝王の館でも真似は出来ない事であろう。原本にある七寶とは金、銀、瑪瑙(めのう)、瑠璃(るり)ラピスラズリ)、碑礫(碑礫貝)大、真珠、珊瑚を言うとか…。

この当時、日本国内では奥州藤原氏が東北地方で産出する「金」を独占して持っていたが、やがて源頼朝に眼を付けられ、源義経を匿ったことを口実に滅ぼされてしまった。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に
摘みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさ
との風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの
方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

ことば座「朗読教室」受講生募集中!!

朗読は演劇です。このことを忘れて、スラスラよどみなく標準語で読むものだと思っ
ていませんか。朗読は、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じるこ
とです。

物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者とし
て劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

自分達の住むふる里を表現し、ヨイショしていく手段として、朗読は最も身近にあって適
したものと言えます。

演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読表現で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行き
たいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

- ・月二回程度の授業を考えております。(受講料月額 3,000 円)
- ・ことば座の脚本・演出家:白井啓治が丁寧に指導します。

連絡先 080-3125-1307(白井)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ことば座第27回定期公演

2014年6月14日、15日（14時30分開場、15時開演）

入場料2000円（小中学生1000円）

常世の国の恋物語第34話

「風に舞う古歌の恋詩（万葉集・古今集）」

朗読：白井啓治 手話舞：小林幸枝

2011. 3. 11. 鎮魂の歌

「かがい舟」＝だれかあの火をみたか＝

朗読：熊谷敬子 手話舞：小林幸枝 ギター：亀岡三典

ふるさと「風の会」8周年歩み展

&

風のことば絵教室展

2014年6月14日・15日：10時～14時30分（入場無料）

ことば座&ふるさと風の会 連絡先080-3125-1307（白井）